

優秀賞

自信を持ちたくて

埼玉県 越生町立越生中学校三年 安田 凱

僕は特別支援学級に通う中学三年生です。小学校低学年の時にADHDだと分かり、それからはみんなと違う教室で過ごしています。

僕は字が読めませんでした。どうしても字が読めるようになりたくて、絵本を見ることにしました。母と一緒に少しずつ音読を始めましたが、全然読めません。毎日泣きながら文字を見つめました。文字は記号のようでした。それでも僕の気持ちは変わらなかったのです、どんな日も必ず音読の練習をしました。

ある日、絵本を開いたら突然、字が字に見えたのです。信じられませんでした。母に先に読んでもらわなくても、自分の力で文字が読めたのです。諦めなくてよかった、文字が読めるってこんなに楽しいんだ。ようやく文章を書くこともできる。人生がガラッと変わったように思えて、胸がワクワクしました。

重ねてきた練習の日々が応援してくれている。「練習は裏切らない」という母の声が、耳元で聞こえたような気がしました。

口と体が勝手に動いた五分間でした。発表会が終わって教室に戻ると、涙が出てきました。もしかしたら誰かに見られていたかもしれないけれど、気になりませんでした。自分を信じるのができた。それが何よりも嬉しかったのです。

発表した作文には、「将来は朗読家になりたい」と書きました。文字が読めなかった頃の僕の夢、「字が読めるようになったら、色々な本を読んでみんなの前で披露したい」の進化バージョンです。文字を読んで表現することは、僕にとって人生の一部になっています。

ずっとコンプレックスを感じながら生きてきました。だけど、もう自分が劣っているとは思いません。僕の中には、頑張ることができる僕がいました。

今年の六月、僕が通う中学校で「立志発表会」という行事がありました。三年生が一人一人体育館のステージに立ち、将来の夢を書いた作文を読むのです。僕は上手に発表しようと思いきや、猛特訓をしました。原稿用紙三枚に書いた文章を、毎日二十回読みました。ボイスレコーダーで自分の声を確認し、滑舌の悪い部分を直していききました。父が木の板で作ってくれた台に乗り、自宅にあるカラオケ用のマイクを前に置いて、ステージに立っている自分を想像しながら読み上げました。見てくれている人に楽しんでほしいと思い、顔の表情やジェスチャーを入れることにしました。忙しい日も疲れている日も、休まずに練習しました。



当日、会場にはたくさんの方が来ていました。前日に母がくれた小さなお守りをワイシャツの胸ポケットに入れて、深呼吸をしながら自分の番を待ちました。僕の足は震えていました。でも大丈夫。積み